

たんぽぽ



vol. 61

平成20年1月発行

発行者 放送大学

富山学習センター

責任者 所長 渡邊 裕司

宝物探し

客員教授 荻原 洋

みなさんは外国語とどのような出会いをしてこられましたか。「英語は大嫌いだった」と答えられる方もかなりいらっしゃると思います。私は運良く英語嫌いにならず、(途中いろいろな偶然も重なって)今の仕事についていますが、最初の頃の英語との出会いで今でもよく覚えていることがあります。

中学1年の頃、自分の持っている辞典である英単語の意味を調べようとしたら載っていなかった、ということがありました。たぶん perhaps という単語だったと思います(笑)。「辞書が小さいのか」と思い、となり町(長野県小諸市)の大きな本屋さんに大きな英語の辞書を買に行くとという一大決心をしました。電車で1駅、歩いて2時間のところでしたが、一人で電車に乗ったことのない田舎の中学生にとってはまさに「冒険」でした。

ところが、無事目的の書店に辿り着き張り切って大きな辞書を調べ始めたまでは良かったのですが、いくら探してもどの辞典にも載っていません。私はスペルを間違えて覚えていたのです。でもその時はそんなこととは思いませんから、がっかりしつつも「ここまで来たのだから一番大きいのを買って帰ろう」と思い(その後まったく開くことのなかった)ある中辞典を買ったのです。

その当時特別英語に興味があったわけではありません。たぶん思春期特有の「背伸びをしてみたい」気分が「勉強のため」という大義名分と重なっただけなのでしょう。それでもその「妙に高揚した気分」の経験は「妙な自信」となってその後の英語の勉強に少なからず影響を与えたような気がします。

「外国語の勉強は無尽蔵の宝探しをするようなものだ」と言われますが、確かにその通りだと思います。たった一つの単語でさえ、その中には信じられないほどの歴史や人々の暮らしが詰まっています。それらは私たちにとって、初めて知る「心ときめく」世界です。外国語を勉強することで発見できる宝物の数は人によって違うでしょう。時期も方法も全く違うはずですが、しかし外国語という宝の山は、私たちが探し続ける限りいくらでも宝物を発見させてくれるものなのです。

もうすぐ小学校で英語が始まりますが、受験のためでもなく将来のキャリアのためでもなく、「生涯にわたって宝の山を探索したくなるような素敵な外国語との出会いを一つでも多くさせてあげたい」とみんなで考えていけるようになれば良いのになあ、と思います。私の中学生の時の出会いは素敵とは程遠いものでしたが、宝物探しの旅へと導いてくれたということだけは確かなように思うのです。